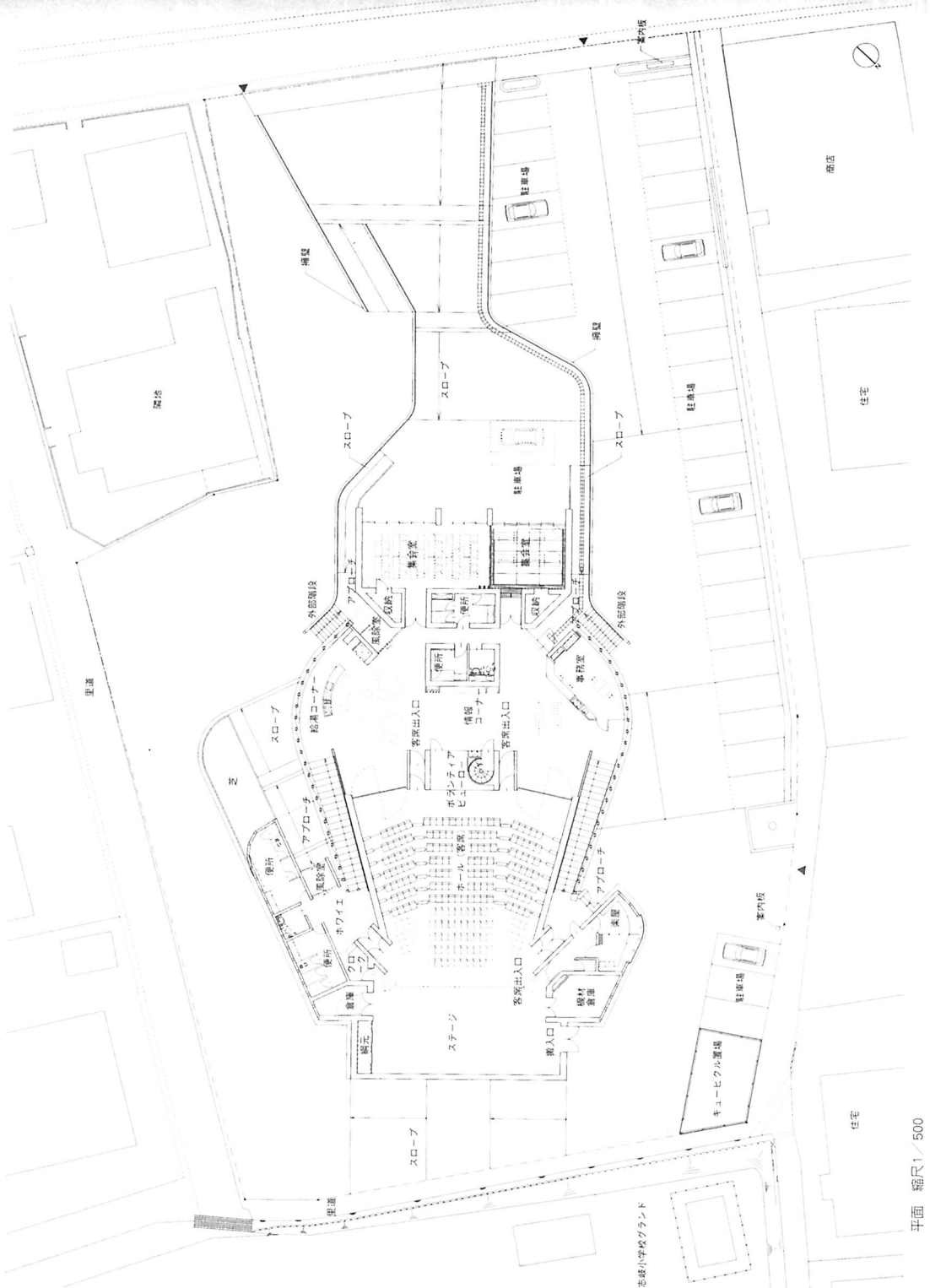


150頁：ホール背面の出入口から集会室方向を見る。左手壁面の仕上げはスチン押縁30mm角φ=60mmOS。151頁上：ホール内観。客席数は207席。その内、平土間部に設けた移動席は66席。ホール背面の回転扉が大きく開き、ホール外周部の空間と一体化される。柔のボラティアビューローはホールに通する窓面がガラス張り。内部の活動を見通すことができる。その上部に位置するコイントローレルームはホールに接する面をガラス張りとしている。151頁下：絵罫コーナー。

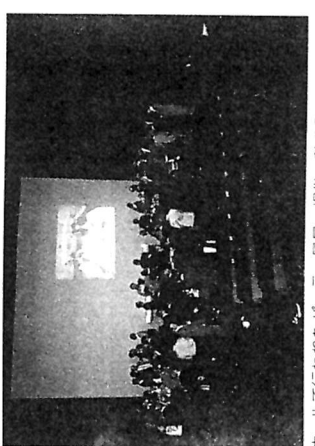




平面 縮尺1/500

劇場ホールの計画的観点から

データで見ても日本のホールは多い、人口あたりの整備数では、南カリフォルニアの実に2倍だ。南カリフォルニアでは、ショービジネスに対応した大型ホールと、舞台芸術NPOなどの運営による小規模ホールとに、目的に応じて明確な二分化がされているが、日本では中間的な席数(500~1,000席)を中心に市部に立地し、よく指摘される低い稼働率に悩んでいる層なのである。



ホールで行われたパーティ風景 提供：寺北町教育委員会

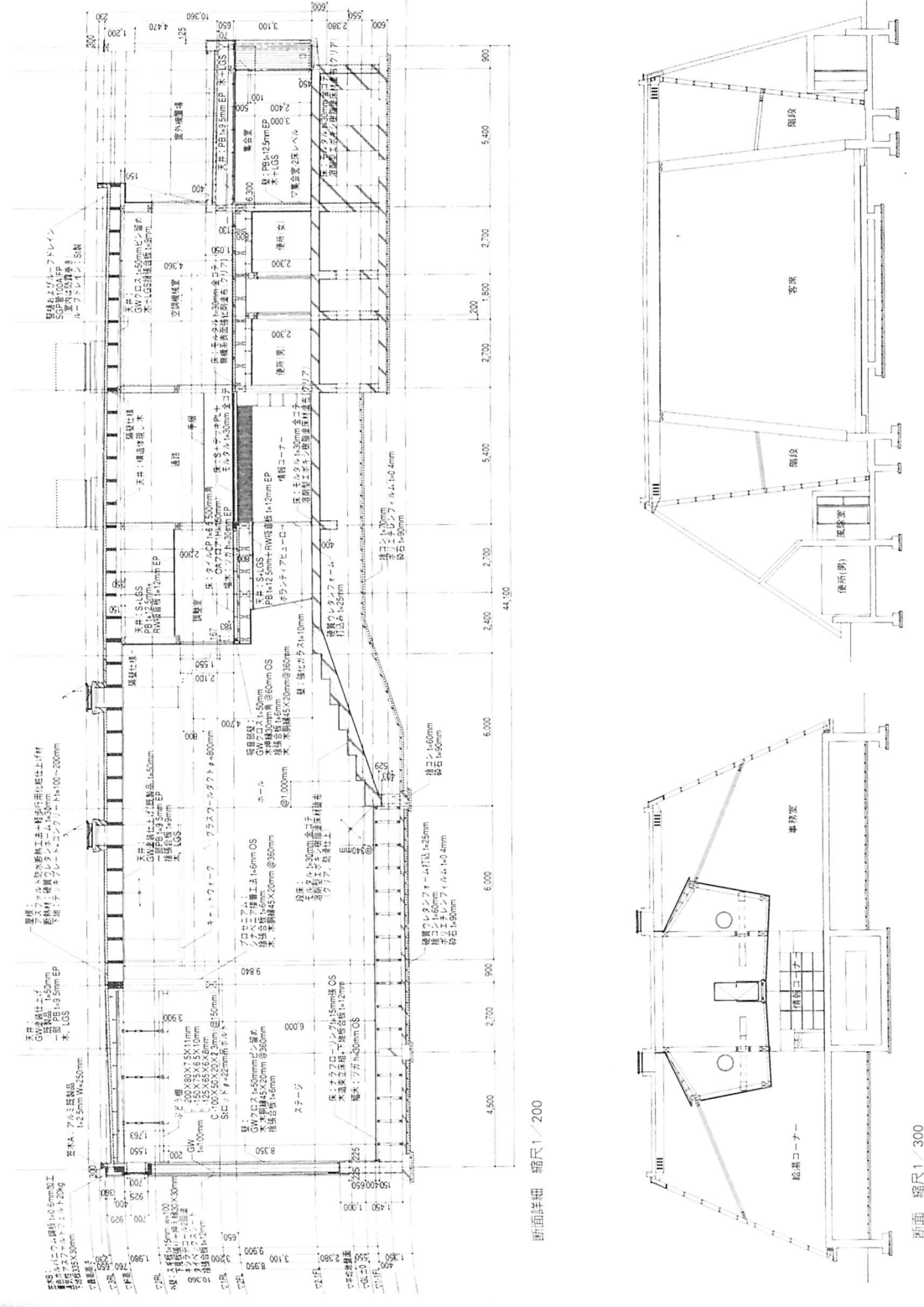
不思議なことに、これらのホールでは都市型の一般的なホールをそのまま縮小コピーしたような施設型が踏襲し続けられている。状況が大きく異なり、運用で実際にミスマッチが起きているにもかかわらず、何か必要なのか明快にされないまま、多くのホールが設計・建設が繰り返されているのだ。今回われわれは、そうした状況にカウンターを提案したいと考えた。その特徴をまとめると以下の6つが挙げられよう。

1. 適切な席数規模：町が使いやすい適切な規模を設定(約200席)。
2. 開かれた構成：後ろの扉が大きく開いて周辺の空間と一体化する。使っていないときにも外から中が感じられ、賑わいのあるときは外を巻き込む(イベントに巻き込める人数は席数以上)。
3. 広い意味での新多目的：今までのホールから排除されてきたアクティビティを包含可能なフラットなステージを設定、前列の椅子を

移動することで、集会を越え「クラブ」「パーティ」「学習発表会」などさまざまな場となり得ることを目指した。

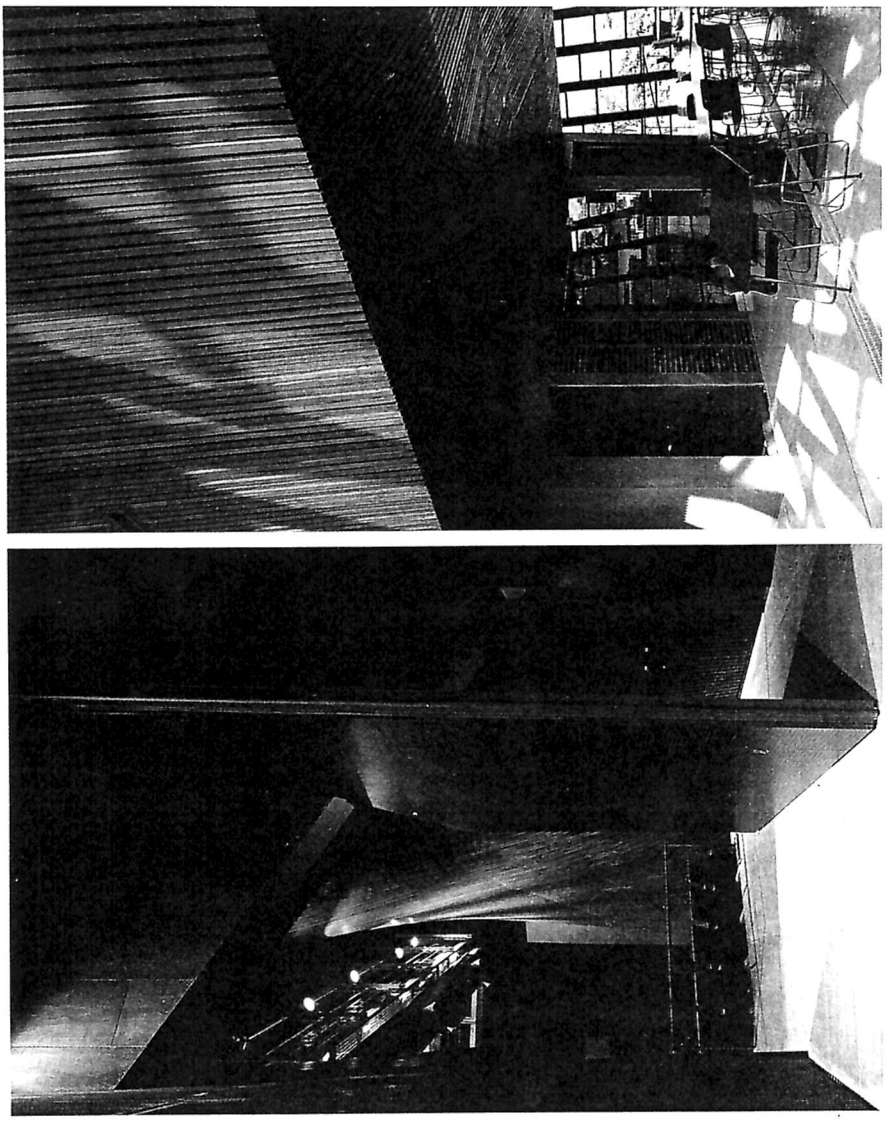
4. 基本を尊重した劇空間：たとえ多目的に使われても、「劇場空間」としての強度を担保し得る。基本プロポーションを尊重(平らなステージの見えにくさを緩和するための急傾斜、ステージの囲み角度など)。
5. 簡素な構成：ローコスト条件に配慮し、上演可能な演目を精査してプロセタワーを省略。そのほか、建築音響についても過大なスペック設定としないよう注意した。
6. 施設運営の核の設置：町民有志の作戦本部であるボランティアビューローをホールの奥、施設中央に視覚化して組み込んだ。

「今度、先生方の想像もつかないような使い方を考え出しますよ。」町民の何人かが自信をもって語ってくれたように、生活の中での発見を啓発する場というホールの新しい機能を開くことができたと感じる。(小野田泰明)



前面詳細 縮尺1/200

前面 縮尺1/300



153頁左：ホール背面の回転層からホール内部を見る。扉の幅は約4.3m、高さ約4~6m。153頁右：情報コーナーを見る。左手のガラス面内部がボランティアビューロー。撮影：本誌写真部

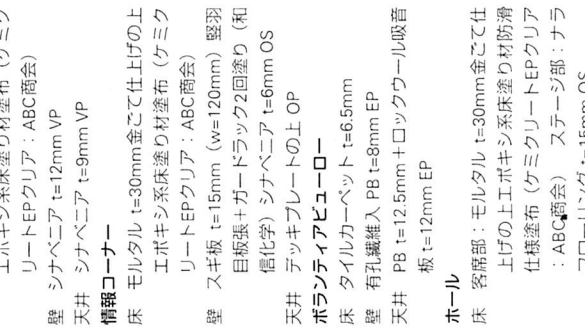
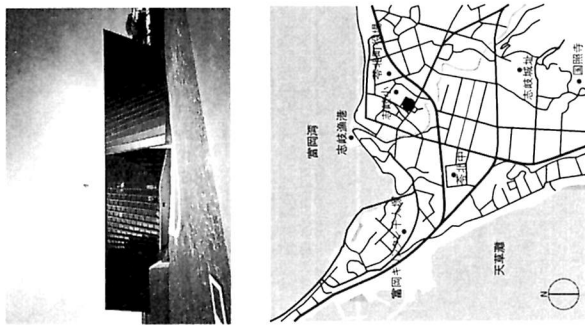
帯北町民ホール

所在地 熊本県天草郡帯北町志岐444-1
主要用途 集会場
建主 熊本県天草郡帯北町
設計 阿部仁史 + 小野田森明 + 阿部仁史
建築 アトリエ 阿部仁史 小野田森明 矢口秀夫
構造 TIS&PARTNERS
設備 総合設備計画東北事務所 担当/小林貞夫 中島一則
照明 コーディネイト 角館英光環境計画 担当/角館英光
監理 阿部仁史アトリエ 担当/阿部仁史 矢口秀夫
施工 中村建設+カネマツ建設工事共同企業体
建築 担当/岡田直士 川端哲明 山下純夫 神尾聖一
空調 衛生・電気 三和電工設備
舞台 サンケンエンジニアリング 担当/簡芳成 林幸夫
集成型 聖徳大学 担当/中野孝啓 坂本昌子 横一 相一
外構 レイジウウ 担当/宮下昇

2階: 5,180mm
 天井高 ホール: 7,460~9,840mm 楽屋: 3,000mm 情報コーナー: 7,460~9,840mm ボランティアービューロー: 2,300mm 集会室: 3,000mm 事務室: 2,500mm 調整室: 2,300mm
地域 都市計画区域外
道路幅員 東西6m 南北4m 北東2m
駐車台数 35台
構造 木造 一部鉄筋コンクリート造
杭・基礎 布基礎
空調設備 空冷ヒートポンプパッケージ方式
熱源 電気
衛生設備 給水 上水道本管直結方式
給湯 局所式電気給湯器方式
排水 下水道直接放流方式
電気設備 受電方式 高圧受電方式
設備容量 330KVA
契約電力 210KVA
防災設備 消火 屋内消火栓設備 消防器設備
排煙 自然排煙
設計期間 2000年12月~2001年3月
施工期間 2001年6月~2002年3月

外壁 スギ板 t=15mm (w=120mm) 南
 京下見張 壁羽目板張+ガードラック2回塗り (和信化学)
 開口部 木製建具 鋼製建具 アルミサッシ (YKKap)
 外構 脱色アスファルト舗装仕上げ アスファルト舗装仕上げ 芝張コンクリート剛毛引き仕上げ
内部仕上げ
集会室
 床 モルタル t=30mm 金こて仕上げの上
 エポキシ系床塗り材塗布 (ケミクリートEPクリア: ABC商会)
 壁 スギ板 t=15mm (w=120mm) 壁羽目板張+ガードラック2回塗り (和信化学)
 天井 PB t=9.5+9.5mm EP
事務室
 床 モルタル t=30mm 金こて仕上げの上
 エポキシ系床塗り材塗布 (ケミクリートEPクリア: ABC商会)
 壁 シナベニア t=12mm VP
 天井 シナベニア t=9mm VP
情報コーナー
 床 モルタル t=30mm 金こて仕上げの上
 エポキシ系床塗り材塗布 (ケミクリートEPクリア: ABC商会)
 壁 スギ板 t=15mm (w=120mm) 壁羽目板張+ガードラック2回塗り (和信化学) シナベニア t=6mm OS
 デッキプレートの上 OP
ボランティアービューロー
 床 タイルカーペット t=6.5mm
 壁 有孔織入 PB t=8mm EP
 天井 PB t=12.5mm + ロックウール吸音板 t=12mm EP
ホール
 床 客席部: モルタル t=30mm 金こて仕上げの上 エポキシ系床塗り材防汚仕様塗布 (ケミクリートEPクリア: ABC商会)
 仕様塗布 (ケミクリートEPクリア: ABC商会) ステージ部: ナラフローリング t=15mm OS

壁 反射部: シナベニア t=6mm OS + グレッシュ30mm角 OS 吸音部: グレッシュ30mm角 OS
 ラスウォールクロス t=50mm + スギ板 t=30mm角 OS
 天井 着色ガラスウール t=50mm (旭フアイバーグラス) PB t=9.5mm EP 有孔 PB t=9.5mm EP
利用案内
 受付時間 8:30~17:00 (平日)
 利用時間 検討中 休館日 検討中
 使用料 (1時間) ホール1,000円/楽屋150円/集会室150円/ピアノ500円/音響・照明500円
 問合せ tel. 0969-35-1324
 撮影 本誌写真部

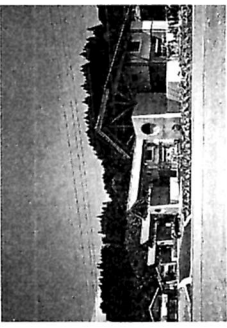
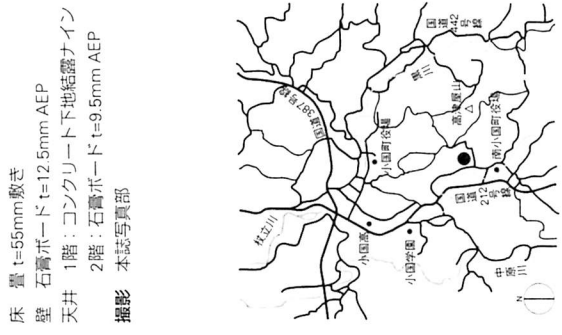


南小国町菅生杉田団地建替計画 (矢津田地区)

所在地 熊本県阿蘇郡南小国町大字赤馬場201・202
主要用途 町営住宅
建主 南小国町長 河津修司
設計 片山和俊/DIK設計室+太宏設計事務所
建築 担当/片山和俊 中山淳 秋田忠俊 小川祥子 (DIK設計室) 甲田雄一 (太宏設計)
構造 増田建築構造事務所 担当/増田一真 田中健 (元所員)
設備 彦根設計事務所 担当/彦根 村上隆光 電気: 島田友友
監理 DIK設計室+太宏設計事務所 担当/中山淳 甲田雄一
面積
 敷地面積 3,490.84㎡
 建築面積 708.59㎡
 延床面積 1,262.94㎡

1階 62.81㎡/2階 67.75㎡ (2階建て住居ベア)
 1階 117.27㎡/2階 129.63㎡ (連棟住居ベア)
建ぺい率 20%
容積率 36%
階数 地上2階
寸法
 最高高 7,850mm 軒高 5,800mm
 階高 2,800mm
 天井高 1階居室: 2,390mm
 主なスパン 3,760mm ~ 5,700mm
地域 指定なし
道路幅員 東5.8m 西4.3m
駐車台数 20台
構造 鉄筋コンクリート造+木造
杭・基礎 杭基礎
設計期間 1999年12月~2001年3月
施工期間 2001年10月~2002年3月
外部仕上げ
 屋根 和瓦

外壁 1階: コンクリート打放し珪水材塗布 2階: 化粧サイディング張
 開口部 アルミサッシ 一部木製建具
内部仕上げ
居間・食堂・台所
 床 複層フローリング (t=12mm)
壁 石膏ボード t=12.5mm AEP
天井 1階: コンクリート下地珪水材塗布 2階: 石膏ボード t=9.5mm AEP
和室



「何をしてくれる方がいいのか？」から始まったワークショップ

経緯
 このプロジェクトはわれわれ(阿部, 小野田)が、高橋誠一コミッションナー、伊東豊雄バイス・コミッションナーから指名を受け、くまもととアートポリス、わたしたちのまちづくり(通称: わたまたち)プロジェクトの招聘建築家として1999年12月に帯北町を訪れたことに始まる。町は、時代の中で変わりゆく町の構造やコミュニティのあり方への問題意識、過疎化への懸念などから、コミュニティの核となって、町民と町をつなぐ何らかの施設の必要性を感じ、この「わたまたち」に参加したのである。当時、新しい町の象徴として役場が国道沿いに移転したため、町の中心部にやはり象徴的にポツカリとできてしまった空き地にその施設を設けたいという強い意向はあったものの、それがどういったプログラムをもつという規模の施設であるのか? といったことは、町営住宅、文化ホール、公園などと意見が錯綜していた。以下は、われわれがこのプロジェクトにおいて、町当局の協力を受けてきたさまざまなワークショップ(以下、WSと表記)を展開して、町民との対話の中でさまざまな可能性を検討し、役場跡地へのホールと公民館両方の特質を有するコンパクトな建築の建設にたどり着き、現在にいたるまでの経緯である。

1) WS1 「WSのコミュニケーション」 2000.3.23 帯北町役場職員を対象に開いた、この町を素材にした企画を立てるといふWSのコミュニケーション。
 2) WS2 「21世紀の町づくりアイデアコンテスト」 2000.5.28 一般(帯北町教育委員会関係者+公募)を対象として、町づくりの企画を立てるWS。
 3) WS3 「計画地周辺のオリエンテーション」 2000.8.2 町内の小学生+中学生+老人クラブを対象に、計画地周辺を歩き回り、町の資源を再発見するWS。
 4) WS4 「企画内容の建築化ゲーム」 2000.8.15 町民+建築学科学者(熊本大学、九州芸術工科大学、東北大学、東北大学)を対象に、敷地に考えられるプログラムを提案し、建築化ゲーム 2000.9 跡地利用懇談会+町長+帯北町役場職員
 5) 計画案のレビュー 2000.11 一般町民
 6) 計画案発表 2000.11.12 わたしたちの町づくり事業関係者+一般の合同プレゼンテーション
 7) 基本設計開始 2000.12
 8) 実施設計開始 2001.1
 9) 工事着工 2001.6
 10) 帯北町民ホール開館準備委員会設立 (2001.8.3以後落成まで10回の開催)
 11) WS5 「WS企画案発表」 2001.8.24/25 帯北町民ホール開館準備委員会+建築学科学者(熊本大学、

ワークショップからコミュニティへ

WSは、何かの解決を導き出すための手段やある決定を正当化する方便などではなく、関係性を取り戻したり、紡ぎ出したりする場である。それ自身が目的なのではないだろうか。帯北町のWSでは途中から、何かが必要かを求める受動的なWSから、その何かを実行する積極的なWSへと変わっていった。WSという仮想の空間で想定された場や人との関係や役割が回を重ねることによって実体化し、仮想の企画が徐々に現実の出来事になっていくプロセスの中で、WSは、仮想の空間から現実空間へシフトし、コミュニティそのものに置き換わっていく。

建築は現象に昇華する

こうして考えると、建築の行為は建物の設計から拡張されて、建築を核とした人びとの活動を継続すること、それぞれの自発的な建築行為を継続的に発生し続ける環境を構築すること、といった方向に向かうのではないだろうか。帯北町では、それがWSという場であった。いかにそれを現実定着させ、持続させるかを設計(?)することに、建物の設計より遥かに多くの時間とエネルギーを割くことになった。WSは現在、運営委員会としてかたちを変えて継続しており、できればわれわれもかわり続けていきたいと考えている。このように「建築」が建物からはみ出して、現象として昇華していく中に、職能の限界を感ずることも可能性が見え隠れしているように思うのである。(阿部仁史)



意見交換会の様子、提供: 阿部仁史アトリエ。

帯北町役場職員、町内の小・中学生、老人クラブ、町民、建築学科学者、帯北町民ホール開館準備委員会など
 阿部仁史
 小野田森明

帯北町民ホール

2000.3~2002.4. 継続中